

司馬遼太郎



街道をゆく 三十四

街道をゆく
三十四
司馬遼太郎

朝日新聞社

一九九〇年 四月 十日 第一刷発行

街道をゆく 三十四

著者 司馬遼太郎
発行者 八尋舜右
印刷所 凸版印刷株式会社
製本所 青柳製本
発行所 朝日新聞社

〒104 東京都中央区築地五―三―二
電話 〇三―五四五―〇一三一(代表)
編集・図書編集室 販売・出版販売部
振替 東京〇―一七三〇

定価はカバーに表示してあります

街道をゆく

三十四

本書には「週刊朝日」一九八九年四月七日号・連載第八百六十二回から、十一月三日号・第八百八十七回分までを収録。

目次

大徳寺散歩

紫野

高橋新吉と大徳寺

念仏と禅

真珠庵

7

21

35

49

思慕とエロス

『狂雲集』

禪風

金毛閣

松柏の志

大仙院

風喰水宿の譜

肥後椿

陽気な禪

小堀遠州

63

77

89

103

115

129

143

155

169

183

中津・宇佐のみち

八幡大菩薩

みすみ池

宇佐八幡

宇佐の杜

宇佐の裏道

如水と中津

花イバラ

中津城

百助のことなど

195

209

223

235

249

261

275

289

301

お順さん

中津の諭吉

山国川

313

327

341

題字 棟方志功
え 須田剋太
装幀 原弘
地図 熊谷博人

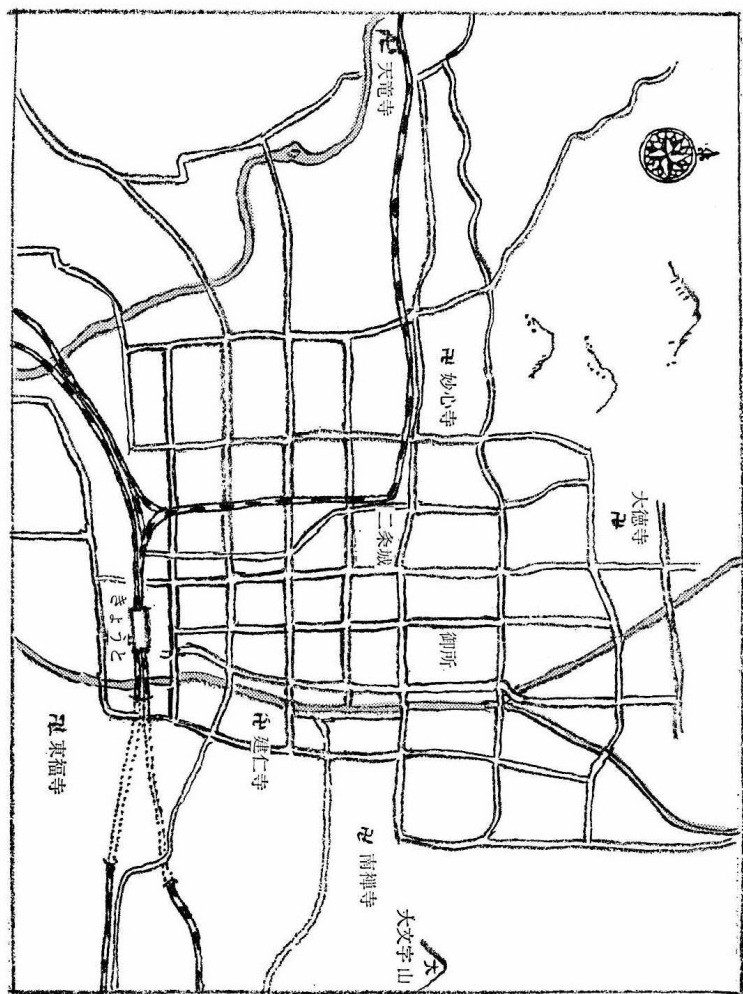
紫^{むらさき}

野^の

大徳寺散歩

一





袖を振るといふのは恋のしぐさだったそうで、『万葉集』にも、集中第一の才女額田王ぬかたのおおきみの歌が出ている。

あかねさす紫むらさき野行き標野しめの行き野守のもりは見ずや君が袖振る（巻第一。二〇）

恋歌ながら、景観が大きく、吹きわたる野風まで感じられる。

紫野とは、染料の紫をとる紫草むらさきがはえている野をいう。

標野しめののしめはしめ縄のしめと同義で、しめのとは「占められている野」を言い、古代の皇室や貴族が獵をする禁野きんやをさす。紫野とは、接続していたらしい。

紫野もまた禁野なのである。

ここで貴族たちが野あそびをし、紫草をみつけては根を掘る。根は染料をとるだけでなく、干して軟膏なんこうをつくり、やけどや湿疹の治療につかうのである。

このため、紫草をさがす野遊びのことを、薬獵いすりかりといった。標野が男どもの遊獵の場であったのに対し、薬獵はおそらく女性たちのあそびだったろう。

ただ、残念なことに、右の額田王の歌は、京都の北郊にある紫野のことではない。

「天皇、蒲生野かまふのに遊獵みかりしたまふ時、額田王の作る歌」

紫　野
と、詞書ことばがきにあって、近江の蒲生野での標野であり紫野だった。天智天皇が、六六七年、近江

に都をうつしたとき、蒲生野に二つの野が指定されたのにちがいない。

都が平安京（京都）にできるのは、その後百数十年経ってからで、同時に二つの禁野きんやも設けられた。

そのことは、奠都の翌年である延暦十四年（七九五）十月一日に、桓武天皇がはじめて紫野で遊獵えんりやくしたことでわかる（『類聚国史』）。

しかし平安の世もさだまるにつれて、天皇の出御しゅつぎよがすくなくなり、せいぜい嵯峨天皇がこの野で遊獵された（『日本後紀』）ぐらいのものであった。多くの場合、出御の自由をえられるのは、讓位して上皇や法皇になられてからである。それだけに、在位中の天皇にとって、

「紫野」

といえば、いまのひとが外国を思うような他の世界だったろう。御所から徒歩で一時間ほどの距離だったのに、信じがたいほどのことである。

円融天皇（九五九～九一）は、平安朝の泰平の世の天皇だった。十一歳で即位し、在位十五年、二十六歳で讓位して上皇になられ、二十七歳で剃髪されて、法皇になられた。が、六年後に崩御されるというはかなさで、ひとはそのご生涯のみじかさをかなしんだ。

天皇としての在位中はおそらく外出のこともなかったはずだが、院（上皇・法皇）になられてからは、石山寺などに出かけられた。しかし、なんといっても、

「子の日の遊び」

に、紫野にわたられたことが、ご生涯を通じてのよろこびだったかとおもえる。

子の日遊びは、上下を問わぬ習慣で、陰暦正月の最初の子の日に、ひとびとが装いをして野を逍遙し、若菜を摘んだり、小松を根ごとひいたりして終日遊ぶ。平安朝から室町時代ぐらいまでは濃厚にのこっていた行事で、公家たちは、この行事のことを、

「子の日逍遙」

とよんだ。

『今昔物語集』卷二十四に、そのことが出ている。

今は昔、円融院の法皇失せ給ひて、紫野に御葬送有りけるに、一とせ此に御子の日に出てさせ給へりし事など思ひ出て、人々哀れに歎き悲しみけるに……。

とあり、ほんのこのあいだ、この野で「子の日逍遙」をされたのに、いまはこの野の煙になりはてられた、ということが、ひとびとをいっそう悲しませたというのである。

平安時代の紫野は、東に比叡山をみて、ひろびろとしていた。

そのころから鎌倉期にかけて、この野にわずかながら構造物が点在しはじめた。

淳和天皇

（七八六～八四〇）といえば、平安京をはじめた桓武天皇の第三皇子で、最澄や空海の在世時とかきなっている。紫野に小さな離宮をたてられたのが、ここにまとまった構造物ができた最初だったろう。

この離宮が、やがて寺になり、雲林院（いまは、地名にのみ残る）と称せられた。ウリンインという音がむずかしいために、京の人は「ウジイ」と訛（なま）って、親しんだらしい。

平安の中ごろ、雲林院の境内に念仏堂が設けられ、大衆相手の菩提講（ぼだいこう）が修されるようになり、講の日には洛中からの貴賤でにぎわった。もはやこの時代になると、紫草や若菜を摘むだけの野ではなくなったのである。

その情景が、平安末期に成立した『大鏡』の第一巻の序の冒頭に出ている。

さるとしのこと、紫野の雲林院の堂内の板敷に、聴聞（きやうもん）の衆にまじってひとときわ老いた人物（架空の人物）が二人居あわせたというのである。

一人は、大宅世継（おおくさよつぐ）という、ことし百九十歳になる老人で、もう一人は夏山繁樹（なつやましげき）という百八十歳ばかりの老人だった。

説法はまだはじまっておらず、老人は退屈しのぎに雑談をはじめめる。たまたまそばにいた三十歳あまりの若侍が賢くて聞き上手で、しかも老人がおどろくほどに物事にくわしかったから、話が太いにはずんだ。

「ただいまの入道殿下」

と、世継がいはじめるのだが、入道殿下とは、藤原摂関政治上、華麗な頂点をきわめ、『望月の欠けたる』こともないと自賛した藤原道長のことである。

以下、問答形式で、物語がすすめられる。

『大鏡』は、嘉祥三年（八五〇）から万寿二年（一〇二五）までの百七十余年の藤原氏全盛の世の歴史を、世継を能でいうシテ役にして語ってゆくもので、藤原氏に対する冷静な批判と、物事についての事実尊重意識をもって全編がつらぬかれている。やがて、その日の法会ほうえの講師が入ってきて、はなしは結末になるという運びになる。

シテ役の大宅世継という老人は、庶民の場にながら宮廷人のこともわかるという履歴になっている。まず、御所のそばで生まれ、幼名は『大学丸』だったということで、好学の人であることをおわせている。

世継の身分では大学寮には入れなかった。だから学生がくしょうの召使をつとめたことで、学問の空気を吸った。

そういうかれからみれば、官職の上下のほとんどを藤原一門で独り占めている閥族体制そのものが片腹いたったであろう。そうであればこそ、かつて土師氏はじしという庶民的な家系から右大臣までのぼり、惜しくも藤原氏に失脚させられ、配所で死んだ菅原道真（八四五〜九〇三）がことのほかいわしく慕わしかった。このあたり、京都における天満天神（道真の神名）信仰の源流を見のおもいとする。

ともかくも『大鏡』の筆者は、歴史を語らせるためにわざわざ百九十歳の高齢者を創り出したが、その妻も、それより十二歳上とした。

妻は、庶民の出ながら、若いころ文徳天皇（八二七～八五八）の皇后明子に樋洗女としてつかえ、宮廷の裏面に通じていたという設定にしている。三十六歌仙のひとりで、この時代、歴史上の人物だった藤原兼輔に懸想されたことがあるという。

まことに設定が、紅の霧をかけたように縹渺ひょうひょうとしている。このあたりも、紫野を舞台にしてこそ成り立ったというべきであろう。

右にふれた中納言藤原兼輔（八七七～九三三）は、紀貫之と親交のあった平安前期の歌人である。屋敷が賀茂川の堤にあったところから「堤中納言」とよばれたが、その曾孫が、紫式部である。門流も末すえになっているから微禄すえしており、紫式部の父藤原為時は受領ずりようがやっという身分に落ちていた。

宮廷にあがった当初、彼女は藤式部とうしきぶとよばれていたが、やがて紫式部とよばれるようになったのは、彼女が創作した『源氏物語』のヒロイン紫むらさきの上うへの名からとられたのではないかといわれている。

しかし、証明しにくいことながら、彼女は紫野でうまれたという伝説があって、そこからそういうよび名がついたのかもしれないという憶測もすてがたい。